

| | | |
|------|--------|---|
| 報告番号 | ※ 号 | 第 |
|------|--------|---|

主 論 文 の 要 旨

論文題目 近現代日本の大衆文化における「ロボット」の表現研究
——『R.U.R.』から『鉄腕アトム』まで——

氏 名 孫 旻 喬

論 文 内 容 の 要 旨

本稿の目的は、近現代日本の大衆文化における「ロボット」の表現とその変容を明らかにすることである。

日本にとって、ロボットは欧米から受容した、いわば“舶来品”であったわけだが、日本人は今日ロボットの最も積極的な生産者になったと言えるだろう。しかし、日本人が創造したロボットのほとんどは欧米のロボットとは異なる性格を持っている。

欧米の制作者たちはロボットが自分たちにとって競争者や敵であるとみなしており、その背後には彼らのロボットに対する警戒と不安が隠されているのだと考えられる。一方、日本人のロボットに関する表現や説明からは、ロボットに対する警戒はほとんど感じられず、代わりに、ロボットに対する好意ないしは憧れが見られる。

日本人のロボットに対する好意的な態度はどこからきたのか。『鉄腕アトム』の創作者である手塚は日本人の「ロボット好き」という現象を日本文化の「本質」として理解している。そして、このような考え方は現在でも多くの人に日本人の「ロボット好き」の理由として共有されている。

しかし、ロボットが日本に紹介された過程に注目すると、日本のテキストにおいて、ロボットは人間と親しいアトムのようなイメージをずっと持っていたわけではない。また、ロボットに対して好感を示す理由も、時代によって異なっている。つまり、「日

本人の資質」という言葉一つで「日本人のロボット好き」を説明することはできないと言える。

「ロボット好き」は日本文化の「本質」ではなく、一時的な流行でもない。このような現象は日本社会の近代化と共に構築されたものであり、ロボットの受容とロボットの表現からは、近代化への過程における「科学」、「機械」、「人間」などの概念に対する認識や、これらの認識の変容を読みとることができる。このような考えに基づき、歴史的な文脈から日本人の「ロボット好き」を考察することで、「ロボット」の本質を探ることができると思われる。

本稿は、ロボットの語源である『R. U. R.』が日本に初めて上演された1924年から、戦後の最も有名なロボット作品『鉄腕アトム』の連載が始まった1951年までの日本の大衆文化に注目し、日本人のロボットがどのように表現されていたのかについて整理した。また、本稿は日本人がどのようにロボットを解釈し、そしてロボットに対する認識がどのように変容したのかについて各時代の時代背景に触れながら、時代を追って分析し、日本人の「ロボット好き」という現象を理解することを目標とした。

本稿はまず日本の近代化の過程における「ロボット」のイメージを整理し、「ロボット」という言葉の意味がどのような経緯を経て定着したのかを明らかにした(第一章)。続いて、20世紀初頭の芸術界における「機械」に対する賛美に注目し、1930年代前後の日本で紹介された「機械芸術論」に関する言説を整理し、日本のアバンギャルド芸術とロボット表現の関係を分析した(第二章)。さらに、田河水泡作『人造人間』(1929)を戦前のロボット像の代表として取り上げ、本作品に登場するロボット・キャラクターである「ガム」の身体表現を分析した(第三章)。続いて、日本の雑誌、特に『少年倶楽部』をはじめとする子ども雑誌における「科学」の扱いに注目し、「科学もの」がどのように戦争色に染められたのかについて分析した(第四章)。また、「日本SFの父」と呼ばれる海野十三のロボット作品を分析例とし、海野作品が表現したロボットの身体像の特徴を明らかにした(第五章)。そして、戦時中に創作された子ども漫画に注目し、子ども漫画におけるロボット・キャラクターやロボットなる機械のイメ

ージを取り上げ、子ども漫画における「機械的な身体」・「近代的な身体」の特徴を考えた（第六章）。さらに、手塚治虫のデビュー時の書き下ろし単行本に注目し、そこに描かれるロボットなるキャラクターに注目し、手塚の初期マンガ作品に見られるそのロボットに対する表現の変容を明らかにし、このような変容の原因を分析した（第七章）。

では、日本人はなぜロボットに好感をもつのだろうか？

ロボットは、近代社会に生きる人間自らの身体の在り方に関する空想であると考えられる。本稿はこの問いに回答するために、日本のメディアにおけるロボットのイメージとその社会、歴史の関係を検討し、三つの「身体像」をまとめた。一つ目は「近代に生きる身体」であり、二つ目は「戦闘する無敵な身体」であり、そして三つ目は「代理としての身体」である。モダニズム時代において、日本人はロボットの機械的な身体に見られる冷たさ、力強さ、合理性などの特性に魅了され、ロボットを通じて、鉄筋コンクリートと自動機械によって組み立てられる近代都市に生きる人間のあるべき姿を発想していた。戦争が始まると、ロボットの身体表現に科学性が要求されたと同時に、それは武器へと接近した。その人間の姿に似ながら人間の肉体を遥かに超える強靭さを有する身体は無敵な軍国の戦士の象徴となり、ロボットの創作者はロボットを通じて軍国の勝利と科学がもたらす未来をイメージした。そして、敗戦によって、戦争のための科学と軍国のために戦うロボットは批判の対象となったが、ロボットに関する空想は止まらなかった。もともと人間の指示に従って行動する科学によって作り出された機械は人間を凌駕する科学のヒーローとして改めて登場し、戦えない人間＝日本人の代わりに戦い、傷つきたくない人間の代わりに傷つき、人間の代わりに社会責任をとる「代理者」となったのである。